

白子の「房総プラント」開発

アルミ製 鳥獣捕獲檻

移動、解体楽で長持ち

白子町の金属加工業「房総プラント」(篠崎武尚社長)がアルミニウム製の鳥獣捕獲檻(おり)「INORI(猪檻)」を開発した。イノシシ、シカなど有害鳥獣対策と、ジビエ料理普及に 대응するための新商品。従来の鉄製に比べ、解体が簡単で持ち運びが楽なのと、サビが出ず長持ちするのが特長。既に茂原市、長南町などに納入している。

同社はアルミ部門に力を入れている。溶接技術の高さを誇る。業務用の脚立のほか、プロ野球のバッティングゲージ、東京パラリンピックで使用されたゴールボールのゴールなどを手掛けている。

鳥獣捕獲檻の開発は昨年、警備会社ALSOKが茂原市にジビエ工場を開業したのがきっかけ。イノシシ、シカを生きたまま捕獲、運搬するための檻を求められ、協力して試行錯誤し作り上げた。

檻は高さ1.5m、奥行き1.5m、幅80cm。鳥獣が餌にひかれて中に入り、ひもに掛かると扉が落ちる。重さは100kgもあるが、6分割できるため1人でも扱える。設計担当の斉藤章夫さんは「鉄だと3〜7年でさびて解体、組み立てが難しくなる。INORIはネットで締められているだけで、工具なしでできる。それがアルミの長所」と説明する。

ALSOKに納めた檻は



房総プラントが開発したアルミ製の鳥獣捕獲用檻(右)と搬送箱=白子町

社のポリシーを熱く語った。